長崎大学教育学部紀要－教育科学－　第58号　71～86（2000年３月）

入学期の大学生における発達課題に心理学講義が果たす役割
――心理学講義レポートの分析を通して――

高　原　朗　子*・尾　崎　啓　子**

The function of the lecture on psychology for the developmental tasks of freshman year of university life
――From analysis of the students' reports submitted after lecture on psychology――

Akiko TAKAHARA*　Keiko OZAKI**

キーワード：入学期，大学生，臨床心理士，心理学講義レポート

本研究の目的は，以下の３点である。すなわち，①大学入学１年以内(入学期)の大学生が心理学講義に求めるもの，②講義を受けることを通じての学生の変化，について事例を挙げ，講義の形態（連続・単発），教官の立場（講義担当者・非常勤カウンセラー）の違いによる比較検討を具体的に行い，③臨床心理士が講義を行う意義を検討する。

考察では，①講義の中でのレポート内容のフィードバックは，他者への気づきを促す効果があるのではないか，②青年期にある学生は，自分の気持ちを理解してもらえる機会や人を求めているのではないか，③臨床心理士が講義する意義として，臨床心理士は言葉の持つ重みや自分が伝える内容（心についてや心理学）の影響力を意識し配慮しているためよけいに学生が心を打ち明けやすい雰囲気が講義で出るのではないか，という点などを挙げた。

Ⅰ．はじめに

筆者らは臨床心理士（注１）の有資格者で，それぞれ教官，非常勤講師（保健管理センター非常勤カウンセラー）という立場で，学生の教育，指導，メンタルヘルス・ケアに携わっている。心身共に変化が大きく，揺れ動く青年期を生きる大学生と日々接していると，頼りなげな風情だった新入生が学年を経るほどに成長していくさまを目のあたりにすることが多い。特に，講義という，臨床とは違う場面での一般学生との出会いは，大学という教育機関の持つ「育む」機能をより意識させ，病理を取り扱うような医療モデルではなく心理的成長を目指すような教育的モデルの観点から学生と接する必要を実感させられる。

鶴田[9)10)]は，学生相談の豊富な経験から，大学生について細分化した学年の発達という文脈においてとらえることの重要性を指摘している。大学入学１年以内の期間を「入学期」

＊長崎大学教育学部
＊＊長崎大学医学部公衆衛生学教室

と呼び，この時期の学生は，現在の自分について，今までの自分について，さらには無意識を含めた自分についての様々な心理的活動を行う，としている。この時期は，すべてを自分で決定することが求められる時期であり，新しい生活にうまく適応できない場合には過去になじんだ習慣や友人関係への逃避が生じやすい，とする。入学期は様々な意味で心理的な混乱が起こりやすい時期だが，多様な体験や人間関係などを得ることにより，「混乱」が否定的な意味での危機としてのみならず，肯定的な意味として成長への起点としても作用することが考えられるだろう。したがって，入学期の学生に対する教官の働きかけも，工夫次第で，学生が今後の学生生活を実り豊かなものとし，自分の生き方を考えていく上でより有用となると思われる。

吉良[2)-6)]，濱野[12)]，藤原[13)-15)]，田中[8)]は，1992年からの一連の論文の中で，九州大学教養部カウンセリング学科で学科独自の一般教育科目として主に１年生を対象に開講されている「人間関係の科学」の中で学生の体験記述を用いることの意義を報告している。吉良[4)]はその意義として，①自分の体験を文章化して記述する機会の提供，②自分の体験が資料として取り扱われる点（記述内容が，その学生にとって「貴重な体験」として理解され，その意味を考えていくように取り扱われること），③他学生の体験を知る機会の提供，④他学生の体験を知ることでの自分自身についての振り返り，の４点を挙げている。また吉良[6)]らは，中でも学生相談に携わる者が講義を行うことの意義を，単に受け身的に「困っている学生が相談に訪れるのを面接室で待つ」という姿勢ではなく，学生の日常生活場面に積極的に関与して学生に働きかける姿勢を持つこと，学生期という大きな変化の起こりやすい年代にある学生たち全般を対象に，彼らの人格発達を援助・促進するような「教育モデル」で関わっていくこと，と述べている。さらに，学生の側からは講義を通じて自分の抱えている悩みや問題を心理学の観点から理解したり考えたりする機会となっていると考えられること，あるいは講義で学生相談担当者の顔や雰囲気を知ったことによって，必要を感じた時には個人的に相談に訪れやすくなる面もあると考えられることを挙げている。

これら先行研究を受け，本論文では①入学期の大学生が心理学講義に求めるもの，②講義を受けることを通じての学生の変化，について，講義の形態，教官の立場の違いによる比較検討を事例を挙げて具体的に行い，③臨床心理士が講義を行うことの意義を検討するという３点を目的とし，考察する。

(注１；1990年より財団法人日本臨床心理士資格認定協会において制度化された資格を持つ者を指す。高度な心理学的知識と技能を用いて，臨床心理査定，臨床心理面接，臨床心理的地域援助及びそれらの研究調査等の業務を行う「心の専門家」のことである。)

II．講義の形態と学生のレポートについて

ここでは，筆者らそれぞれの立場や講義形態，レポートの位置づけの違いのもとに，学生の変化についての事例を挙げ，考察する。

〔実践事例１〕

〈講義の形態〉

期間：X年４月～９月　週１回90分　15コマ（連続講義）

対象学生：大学１年生（学部は問わない）約120名

学生との接し方：臨床心理士だが講義担当者（以下，講義者と略す）としてのみ接する

講義の内容：一般の心理学概論

講義者は臨床心理学の立場から人間の発達過程や心理状況を論ずる講義であることを，初回（講義オリエンテーション）で明言した。また，以下の5点を学生とのルール（契約）として伝えた。

学生との講義ルール：1．遅刻しないこと
2．私語しないこと
3．飲食しないこと
4．携帯電話などの電源を切ること
5．個々人のカウンセリングはしないこと

1～4は，講義を行う上での基本的な約束として伝えた。例えば3の飲食云々については海外のレクチャーでは飲み物など飲みながら講義を進めているケースもあり，人によってはこれを制限することに抵抗を感じる者もいるかもしれないが，筆者はこちらも全力で講義を行うので学生側も90分間講義の内容に集中してほしいという決意の現れとしてこれをルールとした。

5については一般的な講義のルールとしてではなく，心理学，特に臨床心理学であるというと過去の講義では必ず公的な評価の対象となるレポートにプライベートなことを場合によると本人の家庭や病気，性的なコンプレックスなどまでも書いてきて，しかもレポートで相談をもちかけた学生に対して講義者としての関わりを貫くと，場合によっては恨みを買うという経験もあったため，あえて明らかにしている内容である。

ただし，このように伝えていても学生は講義の性質上個人的なことを書くのではないかという予測はたてていた。しかし，それを少しでもセーブする力を育てたいというのがねらいであった。

レポートの内容：

講義レポートは毎回講義終了後にその場で書かせ，提出させた。それは(1)今回の講義の内容（あなたが理解したこと），及び(2)感想・意見・疑問（プライベートな質問や相談は受け付けない），という2つのことを記述させるものであった。

それを毎回提出させ，その内容をもって出欠の確認及び評価の一部とした。

内容分析：

この講義の初回（オリエンテーション）と最終回（結果的には13回目）のレポートを下記のように分類した。

(1)　内容について
1．講義のやり方についての記述（教官の印象を含む）
2．一般的な心理学に関する記述
3．臨床心理学に関する記述
4．社会的な現象に関する記述
5．自分自身（プライベートなこと）に関する記述

(2)　教官との関係を求めているかどうかについて
A．教官との関係を求め，かつ教官を肯定的にとらえている
B．教官との関係を求めているが，肯定的否定的のどちらでもない
C．教官との関係を求め，かつ教官を否定的にとらえている

D．特にそのような記述なし

以上について分類したところ，初回は表１，最終回は表２のようになった。

表１　講義初回のレポートの記述分析

	1.講義のやり方についての記述	2.一般的な心理学に関する記述	3．臨床心理学に関する記述	4．社会的な現象に関する記述	5．自分自身に関する記述	計
A．教官を肯定的にとらえている	8	0	1	0	2	11
B．教官との関係を求めているが肯定的否定的どちらでもない	0	0	0	0	0	0
C．教官を否定的にとらえている	1	0	2	0	1	4
D．特にそのような記述無し	72	11	6	5	11	105
計	81	11	9	5	14	120

＊数字は人数

表２　講義最終回のレポートの記述分析

	1.講義のやり方についての記述	2.一般的な心理学に関する記述	3．臨床心理学に関する記述	4．社会的な現象に関する記述	5．自分自身に関する記述	計
A．教官を肯定的にとらえている	11	0	0	2	15	28
B．教官との関係を求めているが肯定的否定的どちらでもない	0	0	0	1	1	2
C．教官を否定的にとらえている	1	0	0	0	0	1
D．特にそのような記述無し	33	4	7	2	37	83
計	45	4	7	5	53	114

＊数字は人数

次に各パターンの典型的なレポートの内容を一部示す。それが表のどこに分類されるかを（初回　１－Ａ　文　女子）のように示した。例えば初回，１－Ａの場合，表１の８人

の内の１事例が記述したものの一部である。文は文系，理は理系の学生を表し，男子は男子学生，女子は女子学生を表している。なお，引用文は原文のままである。

（初回　１－Ａ　文　女子）
先生は私には母親を思い出させるような，名前のごとく朗らかな方で，道理の通った方だという印象を持った。

（初回　１－Ｃ　文　男子）
教官が，自分の授業を聞く上での注意を説明する時妙に力が入っていたのが頭に残った。そして大学の授業はこんな一般常識から考えれば当然のルールをわざわざ提示しなければ進めることができないのかと少しあきれた。

（初回　２－Ｄ　文　男子）
臨床心理という言葉の〝臨床〟という所は〝床に臨む〟ということなのだが〝床に臨む心理学〟，はて，床に臨んで何か得られるのだろうか，臨床とは何ぞや？
（補足；臨床についての質問だが言葉の定義の問題なので一般心理学に関する記述として分類した）

（初回　３－Ａ　理　女子）
教官と学生の立場とカウンセラーとクライエントの違いについて説明を受けた時にはとても納得がいき，身がひきしまる思いがした。

（初回　３－Ｃ　文　女子）
心理学なのに先生に相談する機会がもてないのが残念に思う。疑問点は心理学が一般教育課程の学生を対象としているのに，今まで学ぶ機会がなかったのはどうしてかと思った。少なくとも中学生の内からきちんと学ぶべきではないだろうか。

（初回　３－Ｄ　文　女子）
自分を知ることで一度しかない人生をよりよく生き，人と付き合う力を養うことが出来ると考えています。心理学的な考え方とその知識を身につけ，人々の心の奥深さを身にしみて伝わることができるように真剣に授業に臨んでいきたいです。

（初回　４－Ｄ　理　男子）
最近は授業に行かない不登校の子やいじめ，親を傷つけたり，悪い時には殺害したりなど，そんな事件などが起きた近所の人たちはその事件など起こした人についてあまり悪いことを言わないので，なぜそんなに悪い人ではないのにそんな事件を起こしたのかな？と思うのです。

（初回　５－Ａ　理　男子）
臨床心理学の専門の方の講義を受けることができて，とても嬉しく思います。プライベ

ートな質問ができないのは残念ですが，僕は友人も多くあまり悩むこともないので，あまり一人で落ち込むこともないとは思いますが…。

（初回　5－C　理　女子）
心理学という分野には私自身内気で人の前で自分を出せないといった悩みを持っていたこともあり，大変興味を抱いていました。先生に相談してみようかなと思ったのですが，5番目のルールでカウンセリングはしない，ということなので残念です。でも，毎回心理学を受けることで最終的に私自身が自分で自分の状態を理解して解決策を見いだすことができるようがんばってゆきます。

（初回　5－D　文　女子　＊留学生）
私は二年前に日本に来ました。日本人の慣習とか考え方とかさっぱりわかりませんでした。今やっと大学生になって自分がまだいろいろわからなくて大学生になったらどうしたら生き生きいけるか，外国人として日本人の大学生とうまくいけるか…，いろんな問題は私の前においてあると思います。

（最終回　1－A　文　男子）
これだけ学生の気持ちを率直に聞いてくれた先生は初めてというのが，この講義の感想です。最後に先生に残す言葉は「一期一会」です。

（最終回　1－C　理　男子）
全ての講義についてもっと大きい声で話してほしかったです。たとえこっちが静かでも聞こえない時がよくありました。

（最終回　1－D　理　男子）
この心理学の授業で自分自身のことが人間の成長していく過程での心の動きがなんとなく少しわかるようになった。

（最終回　2－D　理　男子）
大人とも子どもともいえない14歳くらいが一番危険である。人の性格ほどまわりの環境一つでどうにでもなります。こわいなー。
（補足；講義の中でこのようなことは話していない）

（最終回　3－D　文　男子）
人間は小さい時から様々な体験をしてきているものだと思った。小さい頃はまだ何も知らなかったり，何でもできなかったりするが，いったん物事を覚え始めるとそれはすさまじいスピードで進んでいく。大人では考えられないような発想ができるのも子どもの特徴だ。

（最終回　4－A　文　女子）
最近のいじめや不登校の問題は，幼い頃の親の子どもに対する接し方に大きく原因があ

ると思いました。こんな身近な視点からつっこんでゆく先生の授業はとてもわかりやすく興味深かったです。

(最終回　4－B　理　男子)
今までありがとうございました。かなり昔の話ですが血液型についてちょっと詳しいことをこの紙の裏にはったのでよかったら読んでみてください。
(補足；2回目の講義で血液型による心理判定は科学的か否かについて話した部分に対する反応が最終回に出た)

(最終回　5－A　文　女子)
先生，今までありがとう。今日が最後なんてとても悲しいですねー。
これからもそのまんまの先生でいてくださいね。私も先生に負けないようがんばります。
その内容とは勉学，部活，そして恋です…。
(補足；初回　3－C　の事例と同一人物)

(最終回　5－B　理　男子)
今日で最後だからなのかどうかわからないけど，今日は先生はいつもより厚化粧な気がする。僕が小学生の頃，先生に日記を出さないことで怒られたのをきっかけに，一番最後に登校して，一番最初に下校する日々を送りました（先生に捕まらないように)。

(最終回　5－D　文　女子)
私は幼稚園の年長組の5～6月にかけて不登校になりました。今日この授業を受けて私のこの行動はおかしいものではなかったのだとわかりちょっと安心しました。

結果と考察：
1）表の結果より
「内容についての記述」では初回時は1．講義のやり方についての記述（含教官の印象）が68％であったが，最終回では，講義ルールではカウンセリングはしない（プライベートな質問は受け付けない）と繰り返し伝えていたのにも関わらず，5．自分自身（プライベートなこと）に関する記述が46％と多くなっていた。これはやはり講義が心理学で人間の心理を取り扱ったものであるため，自分のことを振り返ったり，自分やそれを取り巻く人間関係について直面せざるを得ない状況を作りやすいからであろう。講義ルールで歯止めをかけていなかったらさらにエスカレートしていたかもしれない。
また「教官との関係を求めているかどうかについて」の記述では，初回時はその記述をした者が合計しても12％であったのが，最終回には27％に増加した。回を重ねることでその教官に対する転移感情というものが出てくるのかもしれない。ただしこれは学生ひとりひとりの対人志向性や興味のあり方によって変わってくる可能性はあろう。また心理学の講義だからそうであったということは，この結果のみでは断言できない。

2）事例より

初回時ではカウンセリングはしないと伝えたことに対して批判的な学生も複数いたが最終回では筆者の意図を明らかに理解した学生もおり，そうでなくても講義者としての立場とカウンセラーとしての立場とでは違うことを大多数は理解したようであった。このことより，やはり臨床心理に携わる者が講義を行う時には，自分の，この場での立場を表明した上で講義を行うことが大切であると思われる。講義もカウンセリング開始時におけるセラピストとクライエントの契約関係と同様に，ルールを通して契約を行うこと，すなわち，今からこの時期まであなたとこういう関係で関わっていきますよと表明することが大切であると思われる。

〔実践事例２〕

〈講義の形態〉

期間：X－１年７月・X年１月・X年７月

年１回90分　各単発講義（連続講義の中の１コマ）

対象学生：大学１年生（学部は問わない）

X－１年７月　約70名・X年７月　約70名（前期受講者・主に文系）

X年１月　約230名（後期受講者・主に理系）

学生との接し方：講義者が臨床心理士の有資格者で保健管理センターの非常勤カウンセラーであることを明言し，今後何か相談したいことができた場合は気軽にセンターを利用するよう積極的に示唆した。

講義の内容：１年次必修科目の全学教育「健康コンデイショニング」（主に成人病など身体の病気の予防を目的とした講義シリーズで，毎回講義担当者が変わる。筆者はその内，心の健康について担当した。時間割などの関係で大半のクラスは精神科医が担当するため，筆者は全入学生の一部のクラスの担当である。）において，心の成長発達や青年期の発達課題（アイデンティティの問題），友人関係についてなど臨床心理学の専門家の立場から解説した。同時に，過食症やスチューデント・アパシーといった心の病について説明し，保健管理センターの役割についても触れた。なお，前期受講者と後期受講者とで講義内容は基本的に同じだが，その時々の社会情勢や事件を反映させるため，説明に用いる具体例は多少変えた。また講義そのものは１回限りなので場合に応じて前年度受講者のレポート内容の一部や学生相談で出会ったケースの抱えていたテーマを，講義中にフィードバックするよう心掛けた。

レポートの内容：

講義レポートは講義終了後の課題とし，１週間後に提出させた。それは(1)今回の講義の内容（あなたが理解したこと），及び(2)感想・意見・疑問，という２点を記述させるものであった。その内容をもって出欠の確認及び評価の対象とした。

内容分析：

この講義のレポートを下記のように分類した。

(1)　内容について

１．講義の感想のみの記述

2．対人関係（親子，友人など）に関する記述
3．臨床心理学・精神衛生に関する記述
4．社会的な現象に関する記述
5．自分自身（プライベートなこと）に関する記述

(2) カウンセラー(講義者)，保健管理センター，カウンセリングに関する記述について
A．記述あり
B．記述なし
また，未記入の者もいたため，その他，として分けている。
以上について分類したところ，前期は表3，後期は表4のようになった。

表3　前期受講者のレポートの記述分析

	1．講義の感想のみの記述	2．対人関係に関する記述	3．臨床心理学・精神衛生に関する記述	4．社会的な現象に関する記述	5．自分自身に関する記述	計
A.カウンセラー,保健管理センターなどに関する記述あり	6	1	0	0	7	14
B.カウンセラー,保健管理センターなどに関する記述なし	62	11	8	5	25	111
計	68	12	8	5	32	125

＊数字は人数　　未記入　8

表4　後期受講者のレポートの記述分析

	1．講義の感想のみの記述	2．対人関係に関する記述	3．臨床心理学・精神衛生に関する記述	4．社会的な現象に関する記述	5．自分自身に関する記述	計
A.カウンセラー,保健管理センターなどに関する記述あり	11	0	0	0	4	15
B.カウンセラー,保健管理センターなどに関する記述なし	83	15	18	17	68	201
計	94	15	18	17	72	216

＊数字は人数　　未記入　10

次に各パターンの典型的なレポートの内容を一部示す。それが表のどこに分類されるかを（前期　1－A　文　女子）のように示した。例えば前期，1－Aの場合，表3の6人の内の1事例が記述したものの一部である。文は文系，理は理系の学生を表し，男子は男子学生，女子は女子学生を表している。引用文は原文のままである。

(前期　1－A　文　女子)
講義を聞いている時点では悩んでいることはなかったが，先生の話を聞いただけでも心

が少し楽になった人はいるんじゃないかなと思った。保健管理センターにカウンセラーがいらっしゃるということなので，もしも不安なことや相談したいことがあれば，ぜひ利用してみようと思う。

(前期　1－B　文　女子)
今日の講義は精神という自分の内面的なもので，とても興味を持って聞くことができた。私も周りの友達や家族に気を配っていきたいと思う。

(前期　2－B　文　女子)
周りに何でも話せる友人や家族がいてくれたなら，とても心強いだろう。もしも友人関係や家族関係がうまくいっていなければ，なんとなく気が滅入ってしまって，勉強など他の事にまで手がつかなくなってしまうだろう。周囲の協力があってこそ自分らしく生きれるのだろう。

(前期　3－B　文　男子)
心の健康とは，まったく悩みのない心だとは思わない。悩みのない心こそ異常だと思う。適度な悩み，つまり不完全な心だからこそ人間といえるのではないだろうか。

(前期　4－B　文　男子)
現代人はいわゆるはっきりとわかるストレスには強くなったように思えるが，逆に潜在的なストレスに弱くなったのではないか。衝動的な行動とかいわれるのも，この内にためたストレスが爆発を起こすからかもしれない。

(前期　5－A　文　女子)
私は4月に部活に入ったが，友人ができず，先輩との関係もうまくいかずに，友達に相談して退部した。私は退部するという手を使うのはなんとなく嫌だったが，それも対処方法だと知ることができたのは良かった。ストレスなど，今まで経験したことがなかったが，経験してみて心だけでなく身体も不健康になり，きつくてつらいものだと知ることができた。保健管理センターも利用して，相談したいと思った。

◎前期受講者で5－Bに分類したレポート内容には，主に以下の2つのテーマが見られた。それぞれの典型例を挙げる。

1．今の自分の状態の確認

(前期　5－B　文　男子)
講義を受けているうちに，自分の今おかれている立場がとても充実し，幸せであることを実感した。

(前期　5－B　文　女子)
先生のお話はけっこう私にあてはまることが多く，実経験としてよくわかりました。ストレスの対処法として挙げられていたものは，私が無意識にとっている行動だと思います。

いろいろ思い悩んでいるのは私だけじゃないと思うと，少し安心しました。

（前期　5－B　文　女子）
今日の講義はなるほどなあと思いました。私は時々息苦しくなる時があって，過呼吸の軽いやつかと自分では思っていたのですが，ちょっと思い込みだったようです。

2．講義内容に照らし，自分を振り返る

（前期　5－B　文　男子　＊留学生）
今日の講義はとても私に衝撃をくれて，今までいろいろ言いたかったことを，はっきり言えるようにしようと思いました。

（前期　5－B　文　女子）
考えてみると，自分はこれでいいんだという自信がないと，対人関係でもすぐふらふらしてしまって，不安に陥ることがよくあったと思います。私は，できるだけ逃げないで，様々なことを受け入れつつ，目標としている新しい自分に生まれ変われたらいいなと思っています。

（後期　1－A　理　男子）
日頃はほとんど気にしない自分の心の健康について考えることができたので，非常に有意義でした。保健管理センターについて詳しく知ることができて，いざという時に頼りになる存在を持つことができたこともよかったです。

（後期　1－B　理　男子）
心の発達について，図を使って説明してくれたのでわかりやすかった。今の我々に関係していることだったのでとても興味があった。

（後期　2－B　理　男子）
私は小さい頃「かぎっ子」だったが，夕食での会話など親とのコミュニケーションをよくやっていたし，良い先生，友人に恵まれたので，グレなかった。人には側に自分を支えてくれる人が必要だと思う。

（後期　3－B　理　女子）
私たちは心の病に鈍感であると思う。身体的な病と違って，具体的な痛みや形がない分，もっと注意深く心のケアをするべきだと思う。

（後期　4－B　理　男子）
最近は「キレる」子供の増加が問題となっているが，彼らには自分の「逃げ道」をつくるだけのゆとりを周囲が与えてくれなかったのではないかと思った。

(後期　5－A　理　女子)
私は今まで，身体的な病気であれば治療をし，身体が疲れていれば休養をとることをしてきたが，精神的なものにはそういった対応をしてこなかった。しかし，これからは精神的な疲れにも休養をとったり，カウンセリングに行ったりしようと思う。お世話になるかもしれませんが，その時はよろしく。

◎後期受講者で5－Bに分類したレポートには，以下の5つのテーマが見られた。典型例をテーマ別に表記する。

1．講義の内容に照らし，自分を振り返る

(後期　5－B　理　女子)
自分も知らないうちに周りの環境から，愛情，非難などを受け，ここまで育てられてきた。それらすべてを統括し，自分なりに解釈し，それをまた周りに対してこたえていく必要があると気づいた。

(後期　5－B　理　男子)
この講義のおかげで，高校の時なんとなく感じていたイライラ感の正体が少しわかったような気がする。今でもそれは感じているが，それはきっと自分のアイデンティティを確立できていないからだろう。自分は何者か，何ができるか，そして何をしたいか。これをはっきりイメージすることで，きっと心の奥に残っているイライラは消えてなくなるだろう。

2．ストレス解消法の披露

(後期　5－B　文　女子)
落ち込んだ時はアロマ・テラピーをすると落ち着きます。リラックス方法を持っているといいと思います。

(後期　5－B　理　男子)
自分は，憂うつになり，暗く落ち込んだ時は，思い切りテニスをする。すべてを吐き出すかのように熱心に打ち込んでいる。

3．心の健康の予防について

(後期　5－B　理　女子)
最近心のゆとりがなくなっていたなあと思った。計画性を持って生活を立て直し，心にゆとりを与え，メンタルヘルスが保てるように，これから気をつけようと思う。

4．自分さがし

(後期　5－B　文　女子)
現在の私は自分らしさと自己主張をどのようにすればよいのかを模索している段階でまだ「ゆとり」は持てていないようです。

（後期　5－B　理　女子）
「これが私だ」という実感を私はまだつかめていない。仕事をしたこともないし，まだ選挙をしたこともない。でも社会に参加するだけでなく，他のところでも「自分」を見つけることができるだろうし，焦らず「自分」の目標を見つけていきたい。

5．成長する私

（後期　5－B　理　男子）
僕は今，将来のことですごく悩んでいたけど，先生の話を聞いて，何かきっかけがつかめたような気がした。これからの自分の変化が楽しみだ。

（後期　5－B　理　女子）
常々何かと悩みは尽きないが，悩むというそのこと自体よりも，それにどう対処し，解決していくかが大切なのだとわかり，幾分ほっとしている。どんな自分を追い求めているのか，せいぜいしっかり悩んで，豊かな情緒，自分らしさを育んでいきたい。
（補足；講義では悩むことについても肯定的に話したが，この学生は対処法の方に関心が向いたのであろう）

結果と考察：
①レポート内容の大半が，1－B（講義の感想のみで，保健管理センターなどに関する記述なし）と5－B（自分に関する記述があり，保健管理センターなどに関する記述なし）に分類された。5－Bの人数は前期が20%，後期が31%で，後期受講者の方が多かった。
②5－Bの内容は，前期，後期で違いがあった。自分への振り返りは共通していたが，前期受講者は現在の自分の状況確認に関心が高く，後期受講者は予防を含めて今後の自分に関心が高かった。
①と②に関しては，大学入学直後の学生は環境の変化に適応しようとすることに精一杯で，周囲にも関心を向け，自分を見つめて将来像を描く余裕は，1年を経て学生生活に慣れた頃に出てくるからではないかと考えられる。
③すべてのレポート分類中で「心理学に興味がある」「心に関心がある」「こういう講義をもっと受けたい」という記述が見られ，数も多かった。
これは実践事例1でも見られた傾向である。青年期は「自分とは何か」という問いに対する答えを模索する時期であるため，学生は心について潜在的な関心があるところへ心理学講義の受講がきっかけとなり，講義の内容を通して自分を振り返り，同年代の他者の考え方や悩みを知ることへの関心が表面化したのではないか。また事例1と2の対象者が一部重なるため，両者に共通した傾向として表れたこともあるだろう。他に，多重人格者やストーカーといった心の病をテーマとするテレビドラマや小説の流行など，昨今のマスコミによる一種の心理学ブームのような風潮が関係している可能性も否めない。

Ⅲ．全体の考察

今回の講義レポート分析の結果により，学生が書くレポートの内容には，講義の形態や教官の立場の違いに関係なく共通点が多いことが判明した。多くの学生たちが，たとえ教

官からプライベートなことを書くことを禁じられていても，レポートの中で自分自身に関する記述を行っていた事実は，青年期にある学生にとって，自分の気持ちをわかってもらえる機会や対象の希求が強いことを推測させる。教官であり，年長者でありかつ人の話を聴く専門家の臨床心理士でもある筆者らは，学生が個人的な体験を語ろうとする時，友人とは質の異なる「聴き手」として意識されるのであろう。入学期の学生は，心理学講義にある意味で自己確認の機会を求め，講義の内容や講義者との交流，レポートを書くことなどによって，自分の過去・現在・未来や他者の存在への思いを新たにし，変化を遂げていくと言えるのではないか。

Erikson, E. H.[1]によれば，青年期の発達課題は，自我同一性（ego identity）をいかに確立していくかということにある。この課題は大人になるために通過しなければならない重要な課題であるが，その過程でさまざまな葛藤，不安，混乱を体験する。社会からも子供時代とは異なった形での行動様式（役割）を期待されるため，課題は危機ともなる。特に，生活場面や所属集団が多様化し内的変化と環境の変化が著しい大学入学期は，学生生活の〝第１の危機〟（入学から１年の夏休みまで）となるが，心理的発達において，この時期に自分自身を振り返り見直して，変化のプロセスを確認することの意義は大きいと言えよう。心理学（臨床心理学）やメンタルヘルスの講義をこの時期に行い，レポートを提出させ，その内容をフィードバックすることは，学生に自らについて考える機会を提供すると共に，同世代の他者の内面の様子を伝えることで，孤立感を弱めることを援助し，他者への気づきをも促す効果があると考えられる。ある程度の軽い悩みは人の成長を促す原動力になるが，悩みがあまりに重すぎたり多すぎたりすると，成長の足を引っ張り身動きをとれなくしてしまう。講義を通じて，「私だけじゃない」という気づき，困った時に助けを求められる機関（保健管理センター）や相談相手（カウンセラー）があるという安心感を得ることで，学生の危機感が軽減する可能性は高いだろう。

最後に臨床心理士が講義を行うことの意義について述べる。吉良[2]は，学生相談担当者が講義で果たしている機能として，以下の２点を挙げている。第１に，学生に内的な刺激を提供し，自分自身の人間関係などの体験についての連想を賦活する機能，第２に，学生の内面に賦活された感情や考えを受けとめる機能である。この２点とも，学生の内面に近づく作業であるため，デリケートな配慮が必要とされるだろう。臨床心理士は，心理面接など日常の臨床活動を通じて，自分が話す言葉や伝える内容の重みを了解し，その持つ影響力への配慮を常に怠らないよう職業的に心掛けている。また，カウンセリングでは聴くことを中心とした関わりだが，講義は一方的に話すという関わりとなるため，一層の配慮をしている。その配慮の表れの１つとして，講義担当教官は講義者に徹するという姿勢を「契約」として始めに示すし，保健管理センターの非常勤カウンセラーは，講義後のフォローまで考えた内容で講義している。こうした姿勢が学生に伝わることで，学生がレポートの中で自分の心をより打ち明けやすくなるのだとすれば，臨床心理士が講義をする意義は，心を扱うことのデリケートさを学生に伝え，ひとりひとりが大切にされる体験の場を提供することといえよう。レポートの中に「ひとりよがりでない先生」「おしつけがましくない講義」という表現が見られたことは，筆者らのこういった配慮が届いている証とも受け取れるのではないか。

臨床心理士が講義を行う意義と，学生相談担当者（カウンセラー）が講義を担当するこ

との意味については，今後，経験を重ねて考えていきたい。長崎大学には現在学生相談室が無いため，精神衛生相談の大半は保健管理センターが受け持っている。入学時のオリエンテーションで精神科医・カウンセラーの紹介を行ったり，「学園だより」や「学生生活案内」といった学内刊行物で気軽な利用を呼びかけているが，講義で認知度のアンケートをしたところ，広く相談を受け付けていることは学生にあまり認知されておらず，むしろ〝病人の行くところ〟というイメージがあった。しかし，筆者が講義を担当したクラスでは，その後，性格テストを受けに来たり，心理学や臨床心理士について質問に訪れたり，進路相談やさらに深刻な悩みを話しに来談したりする学生が現れ，保健管理センターの敷居が多少低くなった印象を受ける。

藤原[15]が指摘するように，今後，学生の現実を理解することにより，ここから出発する大学教育・学生相談のあり方が問われる必要があるだろう。学生の心に届く関わりや場面を，多方面から工夫し働きかけていくことが，大学生の成長・発達にとって意味深いものと考える。

参考文献

1）Erikson, E. H. IdentityandtheLifeCycle　PsychologicalIssuess, Vol. 1 (1959)（小此木啓吾訳 自我同一性 アイデンティティとライフサイクル 誠信書房　(1973)）

2）吉良安之　カウンセラーとしての講義の経験　九州大学教養部カウンセリング・リポート　No. 4 (1992)　28-34

3）吉良安之　大学入学後の心理的混乱の諸側面――講義における大学１年次生の体験報告から――九州大学教養部カウンセリング・リポート　No. 5　(1993) 50-61

4）吉良安之　授業の中で学生の体験記述を資料に用いることの意義　九州大学　教養部カウンセリング・リポート　No. 6　(1993)　34-46

5）吉良安之　学生は大学入学後の自分自身をどのように評価しているか　九州大学教養部カウンセリング・リポート　No. 7　(1995)　52-62

6）吉良安之 体験と知識を繋ぐ講義の実践――周辺教養科目「人間関係の科学」の授業経験から――「大学教育」2　九州大学大学教育研究センター　(1996)　75-84

7）斉藤誠一　青年期の人間関係　培風館　(1996)

8）田中健夫　１年生前期における変化のプロセスを振り返ることの意味――講義「人間関係の科学」でのミニ・レポートの活用を考える――　九州大学六本松地区カウンセリング・リポート　No.10　(1998) 29-41

9）鶴田和美 大学生の個別相談事例から見た入学期の意味――学生自身が行う「もう一つのオリエンテーション」とその援助――名古屋大学学生相談室紀要 Vol. 3　(1991)　3-14

10）鶴田和美　学生生活とアイデンティティ形成 「学生相談と心理臨床」 金子書房 (1998)　79-88

11）鳴澤實　こころの発達援助――学生相談の事例から――ほんの森出版　(1998) 12-29

12）濱野清志　授業を通じた学生相談機能を考える　九州大学教養部カウンセリング・リポート　No. 4 (1992) 35-49

13）藤原勝紀　教育指導における学生相談的機能　九州大学教養部カウンセリング・リポート　No. 5 (1993) 21-49

14）藤原勝紀 学生相談担当者による授業の固有性について 講義「人間関係の科学」に関する学生による評価から 九州大学教養部カウンセリング・リポート No. 6　(1994) 19-33

15) 藤原勝紀 大学生自身がみた現代学生像について 九州大学教養部カウンセリング・リポート No. 7 (1995) 23-51